

へき地児童生徒の学習に関する総合的研究、

— 教師の果す役割 —

石川 桂 司

“Studies of the Achievement of the School Children in the Remote Districts”

— The Role of the Teacher —

KEISHI ISHIKAWA

はじめに

へき地児童生徒の学習に関する研究のなかで、¹「教師班」の明らかにしようとした点は、教育効果（学習指導・生活指導を含む教育全般についての効果）にかかわっての教師の果す役割についてである。しかし、教育実践における教師の役割といっても、その実態は複雑であり多様である。教師の指導能力や研修状況から、へき地という地域における教師集団の生活の実態、地域社会における社会教育活動そのほかの仕事の多忙さ、さらに、教師各自のへき地教育に対する考え方など、多角的に考察され究明されねばならない。

このうち、本稿では、教師の学習指導に対する取り組み方について考察し、教育活動における教師の果す役割の重要性を明らかにしようと考えた。

たゞ、昭和37年度は、研究第一年度であり、研究計画の都合から、授業分析研究のような特定時間の学習指導過程についての微視的な研究を行うことはせずに、学習環境・学級構成・教育内容・教具教材・教師の学習指導観など、あくまでも、毎日毎日の学習指導を成り立たせている基礎的条件について、A・B・C・D4校を比較検討することにとどめた。さらに、この基礎の上に立って、特定教科の特定時間の学習指導過程について、吟味され統制された条件下における微視的な考察がなされなければならないが、これについては、各校の協力が得られれば、次年度に計画したい。

I 研究のねらい

児童班の大沢氏の論文「へき地児童生徒の知能と学力」（未発表）にみられるように、研究対象校であるA・B・C・D4校の学力テストの結果には大きな差がみられる。すなわち、同一規模、同一へき地級数校であるA校とB校、C校とD校を比較した場合、A校、C校がそれぞれ、B校、D校よりも有意の差を示してすぐれている。勿論、このテストの結果が教育効果のすべてを示すものでないし、学力の全ぼうを表わすものではないだろうが、それらの一面を表わす測定結果に差が見られたことは事実である。この差は、何に起因するものであろうか、それは、学習活動を成り立たせるいろいろな条件が複雑にからみあって生じたものであろう。これら、学習の諸条件のうち、教師の側面について次の点を明らかにすることが本研究のねらいである。

(1) 学級編成について

複式形態など学級編成の実態とそれに対する教師の取り組み方、考え方について明らかにする。

(2) 学習環境の物的な面について

学校図書館の設備、その他教具教材等の充実状況を調べ、それをとらして、学習指導のための環境づくり条件づくりに、教師がどのようなはたらきをしているかについて考察する。

(3) 学習指導についての考え方

次の視点から、教師のへき地学校における学習指導への取り組み方、考え方を比較検討する。

- a) 教育内容・教科書について
- b) 教具教材の利用状況について
- c) へき地社会についての考え方

(4) 授業について

実際の授業を通して、授業にあらわれた4校の学習指導の特色について考察する。

II 研究対象と研究方法

研究対象としては、学校規模・へき地級別並びに本校分校の別の三点から考慮して、次の4校について、教師に対する面接と質問紙により比較研究法で行った。

第1表 研究対象校

校名	A校		B校		E校 C分校		F校 D分校	
へき地級数	1級		1級		2級		1級	
児童生徒数	小 中	75名 50名	小 中	124名 53名	小	48名	小	42名
学級数	小 中	3学級 3学級	小 中	6学級 2学級	小	2学級	小	2学級
教員数	小 中	4名 5名 (校長兼任)	小 中	7名 5名 (校長兼任)	小	2名 (夫婦)	小	2名 (夫婦)

III 結果とその考察

1. 学級編成状況について

へき地の学習指導のむずかしさは、複式学級という学級編成上の問題に起因する。この点から、研究校4校について比較すると、次のとおりである。

A校：小学校——1・2年，3・4年，5・6年の2個学年複式

中学校——各学年単式

B校：小学校——各学年単式

中学校——1・2年複式，3年は単式

C校：} 小学校分校——1・2・3年（女子教員担任），

D校：} 4・5・6年（男子教員担任）の3個学年複式

この結果から、同じ規模のA B両校を比較した場合、学習指導の基本条件である学級編成状況については、B校の方がA校より恵まれている。

しかし、B校でも昭和36年までは、小学校に2個学年複式学級が1学級あって、学習指導に困難をきたしていたが、昭和37年4月に交代した新任校長が町教育委員会にはたらきかけた結果、これを解消して単式とした(G教諭談)。しかるに、この学級増のための教室がなく

職員用玄関を改造して小学校3年生の教室にした。このため、職員用來客用の玄関は、0.5坪ほどの「さしかけ」をおろしたバラック作りの玄関となり、靴の置き場にも困る状態である。旧玄関を改造した教室は、わりにきれいな部屋になっていたが、職員用來客用の玄関は、ごく粗末なものであり、へき地の小さな学校で、学級をひとつ増すための苦労のようすがまざまざとうかがわれる。

このような状態は、このB校に限らず、県内各へき地に多く見られ、図書館や職員室が教室に利用されるのはまだいい方で、物置小屋や玄関、廊下などをベニヤ板で仕切ってバラックの教室を急造し、単式学級にして効果をあげようと努力しているところが多い。

C校・D校は、いずれも分校として典型的な形態であり、夫婦の教員がそれぞれ高学年学級低学年学級を受持っている。このような形態は、岩手県の場合、非常に多い。最近では、こうした分校の子どもたちにも効率の高い学習指導をということから、1・2・3年の低学年のみを分校で指導し、4年生以上の高学年は数キロ離れた本校に通学させているところもある。しかし、このC・D校のように、本校までの距離が6～10キロもあり、バスも通っていない地方や通っていても回数の少ない地方の分校ではこのこともなかなかむずかしい。

このように、A・B・C・Dいずれの学校でも複式学級をもち、各担任教師はその学習指導のむずかしさをのべている。とくに、1時間の指導のうちで、直接各学年に指導できる時間が少なくて困ること、1年間に2冊以上の教科書を消化することのむずかしいこと、教材の用意や教材研究が充分にできないことを訴えていた。

分校であるC・D校の授業からは、3個学年複式指導のむずかしいことがよくうかがわれた。写真⑥は、C校4・5・6年の3個学年複式学級で、教卓の上にならべられた3冊の教科書、3冊の指導書を用いて社会科の授業を行っている教室風景である。

しかし、このむずかしさの中で、より効率的な複式授業をというねらいから、D校のH教諭が、同単元指導¹⁾についてとくに工夫をこらしていたのが目立った。

他の学校でも、社会科理科など国語算数以外の教科は同単元指導を行っている学級が多い。しかし、これも、3個学年以上の複式となればなかなか容易でない。

この点から、まず複式学級を少くすること、せいぜい2個学年複式にとどめるように、とくに、1年生の入門期だけでも単式化して指導できる体制にまで学習指導条件を高めねばならないと考える。

2. 学習環境整備の状況について

次に、学習環境整備の状況について4校を比較してみる。概括して次のことが言える。

すなわち、最近のへき地学校の条件整備には均一化の傾向と、さらに、その中にも各学校独自の特色があるということである。つまり、理科教育振興法その他のいろいろな法的な措置によって、同じ規模の学校では、だいたい同じ程度の設備がなされていること、とくに購入している物品の種類も、ほぼ同じのものであった。こうした均一化の傾向は、教育の機会均等の理念のもとに行われていることでもあり、それ自体正しいことではあるが、反面、利用という観点よりも、ただ予算がついたから購入したという傾向がないわけではない。

一方、こうした均一化の傾向の中にも、よく調べてみると、なかには、これまでの学校の歴史の中で、その時々の教師の考えと努力によって、すぐれた特色を示している学校もある。(たとえば、A校の放送設備)

このように、均一化の傾向と、その中にみられる各校の特色といった二つの角度から、以下、項目毎に考察してみよう。

1) 文部省編「わが国のへき地教育」p.79。

① 理科設備について

理科関係の設備については、4校とも、理科教育振興法(昭28法186号)による補助金の交付を受けている。金額と交付年度は下記の通りである。

A校	—	小学校	: 昭36	10万円
		中学校	: 昭35	16万円
B校	—	小学校	: 昭33	10万円
		中学校	: 昭36	16万円
C校			: 不明	12万円
D校			: 不明	不明 ¹⁾

理科設備備品についての詳細は省略するが、同じ規模のA校とB校、C校とD校では、ほぼ同じ状態を示している。これは、法にきめられた枠によるためや、業者の方でだいたい常識的な品目をセットにして紹介するためのようである。(写真①参照)

このように、同じような機械器具を購入はしているが、A校とB校を比較した場合、B校の方が、より現実的な実用的な買い方と運用をしていた。これは、B校の中学校理科担当T教諭が、とくに地域社会の現実に応じた教育ということに熱心であったためである。たとえば、試験管や薬品など、実験実習に必要な物品の購入も計画的であり、試験管は20本前後、その他薬品も毎年補充していた。これは、購入された理科設備がよく利用されていることを示しており、現に、われわれが調査した数日間にも、いくつかの実験を行っていたし、機械器具類にも、常時利用された跡がみられた。これに対し、A校の理科設備は、余り利用されたようすがなく、購入以来かなりの年月のたった機械器具も新しいまゝ戸棚の中に並べられてあり、試験管・薬品等の消耗品も、購入以来、全然補充されていない。

C校D校は、いずれも、昭和37年度、教員が全員交代したばかりで、くわしい資料を得られなかったが、とくにD校では、前年度までの備品簿もなく、その他事務引継ぎもないので現在のH教諭が当惑していたのには驚かされた。これは、前任者のずさんな分校経営を物語るもので、小規模な分校などでは、ありがちな問題点と考えられた。

② 図書について

「学校教育に欠くことのできない基礎的な設備」(学校図書館法第1条)である学校図書館の設備状況は、第2表に示した通りである。

これを見て、まず目につくことは、4校とも、文部省が昭和28年学校図書館法施行令に示した最低目標にも達していないということである。すなわち、各学校の児童生徒数によって同法施行令の規定冊数を計算し比較してみると、A校の小学校が72% 中学校が42%、B校の小学校が46% 中学校が43%、C校が71%、D校が38%という充足率を示しているに過ぎない。とくに学校図書館法では、小中学校の場合、全国的にはほぼ基準どおり充足したという理由から、昭和33年の改正をもって、図書購入補助が打切られているのであるが、このようなへき地の学校の実態は、あまりにも大きな落差を感じさせるものである。まして、学校図書館審議会の答申による「学校図書館基準」の規定冊数には、ほど遠い現実である。

このように、いずれも低い数字を示しているのであるが、4校の間にも、かなりの差がある。すなわち、数字の上から同一規模のA校とB校、C校とD校について比較してみると、B校よりもA校が、D校よりもC校が、それぞれ、高い充足率を示している。

また、図書室について4校を比較した場合、表のようにA校が最もよい条件をそなえていた。

1) 交付されたことは事実であるが、前任者からの備品簿その他の事務引継ぎもなく、交付年度、金額ともに不明。

第2表 学校図書館設備状況と利用状況

	A 校		B 校		C 校	D 校
	小	中	小	中		
図書数 (冊)	270	249	235	256	220	113
児童生徒数 (名)	75	50	124	53	48	42
1名当り平均冊数	3.6	5.0	1.9	4.8	4.6	2.7
学校図書館法による旧最低基準 (冊)	375	600	510	600	300	300
現行文部省基準	500	600	572	600	500	500
図書室の状況	明るい会議室と兼用図書室 閲覧用机, 椅子 約 6.5坪		体操場そばの暗い体操用具室と兼用図書室 机, 椅子なし約2坪		うす暗い教具室との兼用図書室 閲覧用机, 椅子	図書室なし (書架は教員室)
児童生徒1人1日当りの利用冊数	0.25	0.85	0.025		0.306	0.022

B校にいたっては、写真でみるように、図書室とは名ばかりであって、体育用具や、オートバイが同居し、すみの方に閲覧カードを置いた机がひとつおいてあるだけのうす暗い部屋であった。(写真②③参照)

こうしたA・B・C・D 4校の図書館設備についての力の入れ方のちがいは、そのまゝ、子どもたちの図書利用状況のちがいとなってあらわれ、表に示すように、児童1人当りの1日の平均利用冊をみると、かなりのちがいのあることがわかる。とくに、A校では、参考書・辞書・名作ものが大いに利用されており、何度も修理や製本されて使われているのも、利用と管理の良さを示していた。しかし、B校の場合は、絵本や童話などのよごれが目立ち、利用カードをみても、これらの本が低学年のみならず高学年や中学生にも読まれている一方、参考書や名作ものは、購入したまゝの状態の数年を経ているものが多くあった。

たゞ、学校図書館について特記したいことは、D校の場合、前述のように恵まれない施設設

第3表 視聴覚設備状況

	A 校	B 校	C 校	D 校
幻 灯 機	2	2	1	1
全校式放送施設	1	1	0	1
ホームセツラジオ	1	2	1	0
ブ レ ー ヤ ー	1	2	1	1
マ イ ク	2	1	1	1
テープレコーダー	1	1	1	0
ス テ レ オ	1	0	0	0
レ コ ー ド	?	114	23	?
ス ラ イ ド	82	18	8	0
掛 図	68	33	13	9
紙 芝 居	50	?	?	0
ス ク リ ン	1	0	1	0
暗 幕	?	?	1	0

(?印は帳簿記載なく不明)

備ではあったが、その中でも、同一種類の辞書類が多く用意されており、たとえば、小学生用の同じ国語辞典が20冊近くも備えられてあった。これは、山村の貧しい子どもたちに、日常の学習時間に役立たせようとする配慮のあらわれであり、特色ある学校図書館として、注目に値しよう。

③ 視聴覚設備について

4校の設備状況については第3表のとうりである。

概括してA校の充実が目立っている。とくに、A校は、放送設備を昭和34年11月に購入して以来、NHK学校放送を継続して聴取し、児童用テキストをとり入れて系統的に指導していた。(写真④参照)

利用のねらいについては、学校長が「いわゆるへき地性を打破し、広い視野に立って、どんな社会に出ていっても、たくましく生きていく人間をつくるために」と述べていた。

また、この学校では、発音矯正をねらいとして、学校長の脚色演出で放送劇を自演しており(後述の「学習会」行事として)、非常にすぐれた録音テープを聞くことができた。

継続利用していた学校放送番組は、次のとうりである。

第4表 A校で利用している学校放送番組

		継続利用しているラジオ番組名	
小	1・2	音楽1年, 音楽2年, よっちゃんのえにつき, げんきなこども	
小	3・4	みんなのくらし, あの村この町, みんなの図書室, なかよしグループ	
小	5・6	音楽5年, 音楽6年, マイクの旅, 日本のあゆみ, 明るい学校, このごろのできごと,	
中	1	音楽教室1年生, 社会科地理, 英語教室1年生	世界名曲めぐり 学級の問題 名作をたずねて
中	2	音楽教室2年生, 社会科歴史, 英語教室2年生	
中	3	音楽教室3年生, 社会科政経社, 英語教室3年生	

ラジオを利用している学校としては、このほかに、D校がある。現在のH教諭夫妻が赴任して以来、「国語教室」「音楽教室」を利用しているということであった。

C校のラジオ利用はなかったが、たゞ、高学年の教室に暗幕を施設し、昼でも巡回の16ミリ映画を利用できるようにしていた。

テレビは、4校とも未だ備えていなかったが、A校ではY新聞社とS電気の寄贈で、近々、テレビを施設できるということであった。

映画については、16ミリ映画を月に1度か2ヶ月に1度の割で巡回利用している程度であり、4校とも、学習指導への利用はなされていなかった。

B校では、スライドを校外指導用にとり入れ、部落座談会で利用している程度であった。

④ 音楽関係について

音楽関係の設備については、AB両校ともピアノを備え、その他の楽器についても、ほぼ同じ程度の充足率を示していた。また、CD両校は、オルガンその他の音楽設備に力を入れ、とくに、C校にあっては、電気オルガンを購入していたし、スベリオパイプを全校児童に購入させて指導していたことは注目された。1本220円のスベリオパイプを、全児童一時払いで購入できるだけの経済力と、教育についての関心が部落にあると見受けられた。

総体的にみて、学習環境整備の歩みからみた教師の取り組み方は、A校とC校が、それぞれB校、D校よりもすぐれていたと思われる。とくにA校とB校は、校舎の建築年度にも大差が

ないにもかかわらず、条件整備の面に大きな差が見られた。それは、校舎校庭の整備状況からもうかがわれた。(写真⑤参照)

すなわち、B校の校庭は、広さはかなりあったが、一本の立木もなく、あたかも、川原を思わせるほどにさびれ、荒れはてたものであった。これにひきかえ、A校の校庭管理は、暖かく教育的な雰囲気をつよませ、ブランコ、鉄棒をはじめ多くの遊び道具、庭木の木陰も、よく手のとどいた校庭という感じを与えていた。

このことから、こうした学習環境の差は、校長をはじめ、代々の教員の教育条件づくりの努力の差として感じられるものであり、これが、4校にみられる教育効果の差の一因となっていると推論することも、あながち誤りではないと考えられる。それほど、4校の間のちがいを見取ったのである。

3. 教育内容・指導資料について

カリキュラムについては、戦後カリキュラム作りの運動が盛んであったり、最近では、「教育課程の自主編成」などのことばでよばれ、教師が、その学校の子どもと地域の実態に立ったカリキュラムを構成することが理想とされている。しかし、このことは、現実にはなかなか容易なことではない。

研究の対象になった4校も、学校独自のカリキュラムや地域サークル作成のカリキュラムで教育しているところはなかった。4校とも教科書を中心として、社会科、理科の場合は、それに地域素材を加味して指導するという型をとっていた。また、中学校の技術家庭科については、A・B両校とも、地域カリキュラムの考え方をかなり取り入れた構成をしている。とくにB校のT教諭は、地域農民からの、いろいろな農業技術の相談にも応じ、授業の中にもそれを生かして教えているということであった。また、T教諭は、教科書にある実験は、この地域に不相当であることから、時にはこれを簡単にし、時には素材を変えてと、いろいろ地域化するための努力をしながら、かなり実験を取り入れた学習指導を行っていた。しかし、調査の結果をみると、総じて教科書を中心とする指導を行っているという答が多い。指導のための資料としては、教科書会社から出版されている教師用指導書によっているという回答が殆どである。指導書以外に資料を使っていると回答した教師は、面接した13人中、参考書5人、「教育技術」などの雑誌5人、村勢要覧5人、年鑑3人であり、とくにC校では、年鑑と指導書以外の資料は使われていなかった。

A校にあつては、参考書・雑誌・市勢要覧のほか、同一地域の他の学校と交換した資料や、その他各種の資料を利用してしたが、これは「学習会」の項で後述する。

また、複式学級のカリキュラムについては、A校の場合、国語算数以外は、部分的に同単元指導を行っており、3学年複式のC校では、音楽と図工のみ部分的に同単元指導を行い、他のすべては学年別指導を行っている。したがって、写真⑥のように、社会科の指導でも、1時間内に、3冊の教科書と3冊の指導書を使って、各学年別に、まったくちがった単元を指導していた。

同じ3学年複式のD校では、各教科に同単元指導の考え方をとり入れて指導しているということであった。

このように、大体、教科書を中心とし、指導書によって教育している形態が多いが、このことは、小規模学校の場合、都会のマンモス学校のように、同一教科の免許を所有している教員が7人も8人もいる学校とちがって、やむを得ない点がある。へき地の場合、条件がよくても、せいぜい1学年1学級であり、教師がひとりの力で、各教科にわたり独自のカリキュラムを作ることには到底不可能に近い。こゝに、地域サークルによる努力が必要となってこよう。岩手県

でも、地域サークルで、こうした地域に立ったカリキュラムを編成しているところがある。しかし、4校の場合、これも認められなかった。

また、複式学級の場合、同単元指導のためにつくられた特別の教科書が欲しいという声が多かった。しかし、これも、3個学年以上の複式となると相当無理があり、少なくとも2個学年複式に止めるような学級編成の方策をとることが緊要と感じられる。

4. 地域社会との関係について

教育の効果は、学校の物的環境をととのえ、教師の指導技術を高めるということだけで期待されるものではない。そこに、いまひとつ、大きく影響を及ぼしてくる要因に、地域社会の問題がある。すなわち、その地域社会の生活の実態、教育に対する期待と関心（教育要求）が、子どもの生活に影響し、教師の教育活動に大きな力を与えてくる。勿論、これら地域の実態は、教師のはたらきかけによって変る面をもつものではあるが、教育の効果なり子どもの学力なりは、教師と地域社会の二つの要素の相互影響の中からもたらされると考える。

このことから、4校にあらわれた教育効果の差の要因をさぐるひとつの手だてとして、地域社会について比較考察してみよう。

たゞ、地域の生活実態、その他くわしい資料は、他の論文（畠山氏）にゆずることにして、本稿では、学習との関係において、地域の関心、意識、要求がどのような状態にあるのかという角度からふれてみたい。

まず、A校の地域社会の状態を一言にしていえば、4校の中で、もっとも都会的色彩が強いといえよう。その端的なあらわれとして、トラックの荷台に乗って調査に入るとき、同乗した部落の40歳ぐらゐの主婦の話に「これからは、出稼ぎに行くにも、家で働くにも、学校を進んで（進学して）教育を身につけなければなあ」ということばがあった。この「教育を身につけなければ」ということばは、そのまゝこの地域の子どもに対する期待であり、学校に対する要求である。事実、A中学校の昭和37年3月卒業生14名のうち、6人が高校に、2人が洋裁学校に進み、5人が就職したのみである。こうした現実を立て、学校でも、進学ムードがいったい、補習授業も行い、教室の壁には新聞社の学力コンクールの参加申込要項がはってあった。こうした進学主義的ムードには、いろいろ批判の余地もあるが、確かにこのことが、子どもたちも教師も「勉強に精をださなければ」と考えて学習に取り組む体制をつくる力となっていた。また小学校の段階でも「学習会」という名でいろいろな自主的研究が行われていた。例えば、地域の実態の統計を調べてグラフにあらわしたり、朗読大会をしたり、放送劇をつくったりして、直接間接に学習力を高める努力をしている。そして、この「学習会」活動で作られた資料が、日常の学習指導の中にその地域教材として取り入れられ、生き生きと活用されていた。

また、月1回行う「学校公開」にも、父母の30%から40%が常に参加し、いろいろ子どもの教育について教師にたずねたり相談したりしている。

つまりA校の場合、父母はかなり都会的な教育要求をもって学校に接し、子どもや教師もこれをうけて学習に力を入れていると言える。

B校の場合、この点、全く別なものを感じさせる。すなわち、教育は学校まかせ主義で、生活も貧しく、高校進学するものも殆どない。部落民の「知的な面についての要求は少い」（教師との座談会から）。したがって、中学生なども、家が忙がしいと言っては早退したり欠席しがちである。父母も学校に対して「宿題を出すよりも、たゞいてもいいから言うことをきく子ども、すなおな子どもにしてくれ」という声強い。戦後間もなく行われたこの地域の「新しい村づくり運動」（農地開放と酪農化の歩み）も、その後停滞ぎみで、現在、学校教育に新しい人間像を期待するほどには至っていない。

そこで、このB校も、多くのへき地学校にみられるように、意識の低い地域社会に対し、若い教師たちが、地域の開発向上を旨として意欲的に取りくみ、部落座談会などを開いて、教育の力で明日の部落の姿を変えようと意気込んでいる段階と見受けられた。とくに、前年度(昭36)までの学校の雰囲気は、なんとなく投げやりな傾向であったが、昭和37年4月、校長と教師4人が変わり、われわれが調査した昭和37年9月には、心気一転し、大いに張切っているという感じであった。現に「校長が交代してこの4月以降、職員室が非常に意欲的になった」と各教員が言っていた。

こうしたことは、実践の面でもあらわれ、昨年まで実施したことがなかった年間総授業時間数の調査をやりだしたり、今まであまりやらなかった家庭訪問を昭和37年度から地域を分担して組織的に全児童にわたってやりはじめ、さらに、11月から校内研究会を予定しているなど、かなり意欲的な実践があらわれはじめている。指導の重点目標に、「生活指導」「PTAの育成」とともにうたっている「学習指導の研究」にしても、昨年までは、抽象的に単に名目的にかかげていたのであるが、「今年から本当にやろうという気で取り組んでいる」(K教諭談)というのが実態であった。これらのことを、部落座談会や家庭への通信などをとうして、停滞気味の部落に啓蒙していこうとしていた。CD両校についてはくわしい面接ができなかったので、この項は省略する。

5. 授業の実態について

前述のように、授業についての詳細な分析は不可能であるが、4校についてそれぞれ、3年～6年の社会科の授業を参観する事ができた。以下、各学校の学年別単元名と、とくに目立った特徴を項的に挙げておくにとどめる。したがって、この、たゞ一時間の授業から、直ちに教育の効果に結びつけて論じることは不可能である。

4校の授業の特徴

A校3・4年生社会科(N教諭)

単元名 〓機械で開く土地、

学校放送「あの村この町」(9月19日放送)の録音テープによる同単元指導。

いわゆる放送中心学習¹⁾である。

子どもたちの放送教材の受けとり方もすぐれていて、低学年頃から放送教材を継続して利用していることを示している。

B校3年生社会科(O教諭)

単元名 〓町の暮らし、

自分たちの住む町の、にぎやかな役場付近と比較しながら教科書利用。

子どもたちの発言も活潑であり、教師の指導も本質をかなりついている。

C校4・5・6年生社会科(S教諭)

単元名 4年生 〓寒い土地と暖い土地、

5年生 〓商業のはたらき、

6年生 〓地球儀をながめて、

完全な教科書中心学習。しかも、読解指導的社会科の授業であり、3冊の教科書の説明に終始する。

たゞ子どもたちの学習態度は非常に積極的であり、教科書の読みとり方もしっかりしている。4年生の地図の読みもすぐれており、今までの担任のすぐれた実践を物語っていた。

前述のような3個学年複式学級の指導の苦労がよくわかる授業であった。

1) 上野辰美他「視聴覚的方法の理論」明治図書、p.196。

D校4・5・6年生社会科(H教諭)

単元名 4年生 『岩手県の漁業』

5年生 『日本の農業』

6年生 『大化の改新』

3個学年のうち、本時は4年生に重点をおいた授業で、H教諭の教育計画からもこのことがうかがわれる。ちなみに、正味42分の授業時間中、直接指導した時間を学年別にみると、4年生に31分40秒、5年生に5分45秒、6年生に3分43秒である。したがって、4年生は教師との話し合い学習が中心となり、5・6年生は、教科書、地図帳、参考書などによる自己学習やグループ作業が活動の大部分であった。

4年生の場合は、地域素材をとりあげた学習指導で、教師もいろいろな教材を用意していたが、子どもらの学習意欲は全く低調そのものである。授業時間全体を通して、子どもの発言は、たゞ2人あったのみ。

グラフや地図の読みもかなり劣っており、C校とは大きな差があった。

む す び

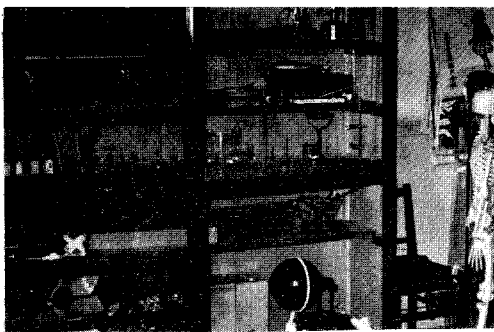
はじめにも述べたように、対象校の都合や調査計画の都合上、本調査のみでは、ねらいとした点を充分解明し得たとは考えられない。たゞ、今までの考察から言い得ることは、次の通りである。

1) 教育の効果は、長い間の教師の実践の積み重ねによって作りあげられるものである。このことは、今まで述べた次の事項から理解される。

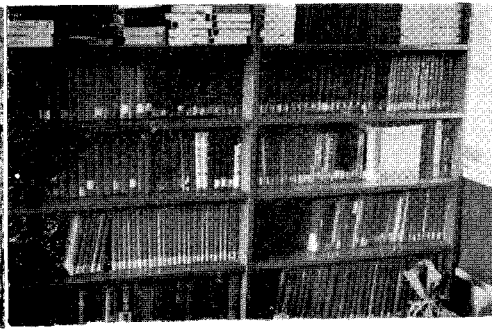
- A校の放送教育や「学習会」をはじめとする長年の実践。
- C校の前任者の長期にわたる地域と子どもに対するはたらきかけと、今日の地域民の学校に対する協力・子どもたちの高い学力との関係。
- 反面、D校のH教諭が、半年前から行っている実践も、前任者の長い間の陥没をなかなか埋めることができない。

2) 教育の効果にとって、個々の教師の努力とともに、学校全体の体制が、より大きな要因となる。このことに関して、校長や分校主任の占める意味が非常に重要になる。

- A校の放送教育をはじめとする学校全体の研究実践体制。
とくに、学級編成の面ではA校より条件のいいB校が、学習指導結果の面で劣っていることは、B校の昭和36年度までの学校全体の実践に対する取組み方と関係する。
- 反面、D校の前分校主任の学校経営のずさんな実態と子どもの実態との関係。



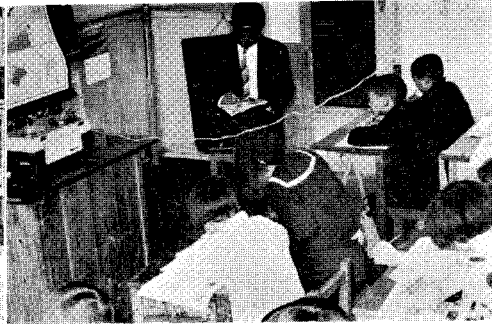
①



②



③



④



⑤



⑥

- ① A校の理科設備
- ② A校の書架のひとつ
- ③ B校の図書室
- ④ A校4年生の放送（録音テープ）を利用しての授業
- ⑤ B校の全景
- ⑥ C校の3個学年複式授業風景